「図書館・情報学概論」のための研究ノート
－図書館学研究のためのいくつかの問題－

柿　沼　隆　志

A Note for *An Introduction to Library and Information Science*
-Some Problems in a Study of Library Science-

Takashi KAKINUMA

目　次

はじめに
Ⅰ．図書館の〈学〉の領域と名称
1．この分野の学問の名称
2．「図書館・情報学」と「図書館情報学」
3．「図書館情報学」の内容と異称 - 根本彰の分析による -
Ⅱ．〈学〉としての成立の可能性
1．成立可能性への疑問
2．アメリカ図書館学への疑問
3．理念不在と〈学〉の確立
Ⅲ．概論書に見る〈学〉の体系と定義
1．椎名六郎『図書館学概論』(1960)
2．椎名六郎『新図書館学概論』(1973)
3．武田虎之助『図書館学概論』(1976)
4．加藤一英『図書館学序説 - 学的体系づけへの探求 -』(1982)

はじめに

図書館・情報学（あるいは「図書館情報学」）は、その祖型である図書館学に比べると、格段に今日的な学問であるように見える。それは、その主要な研究対象の一つ、〈情報〉が、現代社会の重要な存在であるためである。それは、喩えてみると、‘片隅の目立たない’図書館学から、‘時代の寵児’、図書館・情報学への変容であった。その知識体系を集約する大冊のハンドブック（『図書館情報学ハ

ンドブック』、丸善、初版 1988 年、改訂版 1999 年）に掲載の、学界の第一人者を網羅した執筆陣の論考に、それが形だけのものでないことが見て取れる。

一方、その数は少ないものの、有力な国・私立の総合大学に、学科および大学院研究科（修士・博士課程）への設置で、その研究と教育の体制も、確立されている。また、司書資格認定の教育は大学が実施することになっており、そのための課程が数多くの大学で全学部生に開かれているのが一般である。図書館学の時代と比べ、図書館・情報学の研究者と履修者の層は格段に増大し、斯学への社会の認識が高まっているように見える。

成果を上げつつある図書館・情報学も、その研究課題の柱である図書館と情報との関係に、いわゆる‘木に竹を接いだ’印象が否めないところがある。情報学が、俗に言う‘文系’と‘理系’にまたがっていることも、その一因であろう。しかし、大きな原因は、特に企業の管理・研究部門や研究所・大学の図書館を嚆矢として、図書館サービスが、情報の処理・提供へと大きく転換して行ったことにある。それは、情報科学を図書館管理･運営に適用し、従来の管理･運営法を情報の観点から組み替えることである。それはあくまでも管理・運営方法の変更なので、図書館の理念についての議論が当面は不要になる。

情報の〈財〉としての価値がますます高まっている現代にあって、情報サービスについては、図書館と情報産業との競合・棲み分けの問題は、図書館にとっても避けて通れない。そこで、図書館とは何かが、改めて問われことになる。また、図書を初めとする多様なパッケージ系のメディアの提供も、依然として重要である。その際も、貸出業者との関係も含めて、図書館の理念が問われることになる。これまで、自明のこととして議論や考察があまり行われてて来なかった図書館の理念の考究が、今まさに求められている。何れにしても､それは図書館学あるいは図書館･情報学の原論になるはずである。

図書館・情報学の研究法については、多様な方法が提示されている。しかし、図書館そのものを解明した著作、即ち「図書館学序説、あるいは概論」と呼びうるものは、数少ない。その一因には、原論研究の年代に当たる研究者の絶対数が少ないことがある。かつて図書館学の学徒は極端に少なく、しかもその世代は第二次世界大戦での犠牲も大きかった。加えて、原論執筆の年代に至った頃に、病に斃れる人たちも多い。しかし、優れた原論が生まれる時期は近いと思われる。現役の学徒の層が格段に厚く、その年長の人々がそれをまとめる年代に近づきつつあり、その次の世代の中にも、水準の高い著作を問うている研究者がいるからである。

そのような時に、あえて原論構築を試みるのは、現役の研究者たちが、情報の観点から図書館の問題を考究する傾向が強いからである。それは、情報が重要な存在になっている現代社会の要請に応える研究態度であるが、情報概念では捉えきれない図書館の部分が取り残されるおそれがある。そこで、筆者は、あえて“伝統的”な観点から、“図書館とは何か”の解明を試みようと思うのである。

その冒頭に呈示すべき、〈図書館の概念〉は、30 年前に論文の一部として発表したことがある[(1)]。さらに、大東文化大学の専任教員在職中には、担当科目の「図書館情報学概論」で、図書館・情報学の体系化を試みる講義を行って来た。本稿では講義ノートなどを基に書き直したものの一部を呈示す

る予定であったが、その前に取り上げるべきことについて述べるに止まってしまった。図書館の概念を初めとする〈図書館学〉の体系の素描は、別の機会に委ねたい。

Ⅰ．図書館の〈学〉の領域と名称

1. この分野の学問の名称

序文では“図書館情報学の体系化”と述べた。しかし、この分野の学問の名称には、「図書館学」と「図書館・情報学」、「図書館情報学」などがある。互いに異称として認識されている後の二者では、後者の使用例が圧倒的に多く見られる。両者の相違点は、記号の中黒（・）の有無であり、中黒は接続助詞の「と」を意味する。ところで、日本の図書館情報学に少なからぬ影響を与えているアメリカでは、「図書館学」は“library science”、後の二者は、“library and information science”である。その訳語は「図書館・情報学」が相応しいはずなのが、日本では「図書館情報学」が使われることが多い。1979年に図書館短期大学が図書館情報大学になったことを、この用語が使われる原因とする見方もある[(2)]。一方、一貫して「図書館・情報学」を用いていたのが、日本初の学科として設置された慶應義塾大学文学部図書館・情報学科と、同学科に設置された図書館・情報学研究の学会である。それらは、学科開設当初は「図書館学科」と「図書館学会」であったのが、1968年に名称を変更し、英語の‘and’が中黒になったという[(3)]。

それでは、「図書館・情報学」と「図書館情報学」は、この分野の学問の名称として、どちらが相応しいのか。あるいは、学問としての違いはどうなのか。一般論としては、中黒を使うのは、それが〈学〉として成立する過程にあるはずである。字義通りに解釈すれば、「図書館情報学」は、「情報学」の一分野の、図書館に関わる学問になる。そして、それを図書館学の一分野で情報に関わる学問とするならば、その名称は「情報図書館学」になる[(4)]。

2. 「図書館・情報学」と「図書館情報学」

その編著の標題に「図書館・情報学」を用いている津田良成は、この〈学〉の“範囲”は“伝統的な図書館学に、さらに新たに現れた情報学という概念を加えたもの”であったのが、“文献に関する情報をコンピュータなどに蓄積し、要求に応じてこれを検索する技術から、これら検索システムを通信網に結び付けて、遠く離れた場所からでもオンラインで検索するネットワーク・システムなども含めたもの”を経て、“扱う情報そのものの探求、その情報の社会活動における役割、機能、それらの情報の効果的利用等の新しい面への追究へと、研究対象を拡げてきた”と述べ、その結果図書館学は“情報学の一部を形成するものであるとの考え方が成立”したという。なお、津田は“伝統的な図書館学”を、“もともと文字、印刷、出版、出版物、その他の資料類などについて、およびそれらの資料類を組織的に収集、蓄積、保存、提供する各種図書館などについて学ぶ”ものとしている[(5)]。

津田の編著書の目次を見ると、“1 図書館・情報学とは、2 情報の流れ、3 情報の生産、4 情報の蓄積・

検索・提供、5 情報の利用、6 図書館・情報センターの管理と運営”となっており、それが情報学の一領域に変容した〈図書館学〉の姿であることが分かる。そして、この考えで編纂された大冊が、『図書館情報学ハンドブック』(丸善、1988) であり、その考えをさらに推し進めたのが、その改訂 2 版 (丸善、1999) である。その学問の名称に相応しいのが、「図書館情報学」であることは、説明するまでもなかろう。それにもかかわらず、同書初版の編集者の一人であった津田が、その 2 年後に刊行された編著書の標題に、「図書館情報学」ではなく「図書館・情報学」を用いたのは、彼が慶應義塾大学の専任教授であったことに因るのではなかろうか。

根本彰は、このハンドブックの改訂版の中で、図書館情報学は、“施設中心に発達し”た図書館学と、“それを批判しながら一般的な社会的技術として発達してきた”ドキュメンテーションとを“統合しつつ (中略) いくつかの研究領域を形成してきた”のに対して、“情報学は、他の学術的な領域との関係を強く持ちながら、さらに一般化した領域を形成している”と述べている[(6)]。この考えを採ると、「情報図書館学」は、この学問を指す名辞としては適さないことになる。

3. 「図書館情報学」の内容と異称 - 根本彰の分析による -

それでは、この四者 (図書館学、ドキュメンテーション、情報学、図書館情報学) の相互関係は、どのようなものか。根本はこれについて、“欧米では (中略) 図書館情報学は、図書館学やドキュメンテーションから情報学へと連なる連続体の中に位置づけられる”と述べ[(7)]、図書館情報学と他の 3 者との関係と図書館情報学の主要な 6 分野、情報学関連の諸学とのつながりを図示している[(8)]。しかし、判然としているように見える図書館情報学と他の三者との位置関係なども、見方によっていくつかの場合に分けられるという。根本の挙げるそれを、使用している番号をそのままに一部省略または語順などを変えて列挙すると、次のようになる。

図書館情報学は、

① “図書館学、ドキュメンテーションが情報学へ向けて深化する途中の形”

② “情報学を図書館という情報システムに適用した研究領域”

③ “プロフェッションの領域で”“図書館学やドキュメンテーション”が“重視している”教育面と、情報学の“研究面を統合した領域”

④ “図書館学”の“対象が拡張し、従来の名称に納まりきれなくなり、とりあえず”選ばれた“名称”になる[(9)]。それぞれの場合について次のように名称を付けると、問題が分かりやすくなる。①は“途中”なので「図書館学」、あるいは“深化”の度合いが情報学に非常に近いとすれば「図書館情報学」、②は情報学の“適用”なので「情報図書館学」、③は“統合”なので「図書館・情報学」、④は従来の名称の適用範囲を「狭義の図書館学」と言い換えて、「広義の図書館学」となる。

このように、この学問について幾つかの異称が可能なのは、根本が挙げたような“諸説があって、図書館情報学の名称およびその概念”が不安定であり、日本では“情報学の理解”に“欧米と異なっ

た面があるので、図書館情報学との関係”は“さらに不安定なところがある”[10]ためであろう。さらに、図書館情報学の分かりにくさの原因として根本が挙げているのは、この名辞を構成する3語（図書館、情報、学）に5つの位置関係の可能性があることである。その一応の解決策として彼が呈示するのは、“〈図書館学が対象を情報一般へと拡張した領域である〉”という“通説”である[11]。その内容は、根本が挙げている6つの分野、“図書館情報センター、サービス、利用者研究、情報メディア、書誌コントロール、情報検索”[12]で、上で紹介した津田の編著『図書館・情報学概論』（第2版）の内容と似ている。上で見たように、この書名が便宜的なものと考えると、この学問の名称としては、「図書館・情報学」よりも、「図書館情報学」が相応しいであろう。

次に問題になるのは、「図書館情報学」か「情報図書館学」かになる。根本の言う“通説”では、「図書館学」が拡張した新しい領域なので、その名称は「情報図書館学」になるはずである。一方、上で紹介した津田の考える学問の名称としては、情報学の一領域を示す「図書館情報学」が適している。しかし、研究者によって見方が違うので、何れが適切かは未解決の問題になる。図書館学の研究者としては、それが「図書館学」の体系に位置付けられるか否かを、試みてみることであろう。

以上のことから、理論構築を目指す〈学〉の名称としては、「情報図書館学」を含む「広義の図書館学」が相応しいことになる。しかし、それは〈学〉の名称にはならないので、「図書館学」よりも「図書館・情報学」を使う方がよいのではなかろうか。それは津田の編著の意味ではなく、過渡期のもの、即ち仮称としてであることは、言うまでもない。

II. 〈学〉としての成立の可能性

1. 成立可能性への疑問

図書館・情報学の祖型である図書館学については、〈学〉としての成立の可能性に、疑問を投げかけられることがあったという。これについて大佐三四五は、“今日においても、図書館学とは如何なるものであるか、の質疑のあるのは当然のことと思うが、図書館学なるものは成立し得るのか、の疑問を抱く者が知識階級の間に少なくない。否かかる疑問は、むしろ現に図書館業務にたずさわっている相当年輩の図書館人から屡々聞くところでもある”と、述べたことがある[13]。岩猿敏生も、“図書館学の学問としての成立を、積極的に否定する見解”として、長澤規矩也の一文を引用し[14]、別の著述でも、“図書館学に対する否定的意見は、日本だけのことではなく、欧米においてもこれまで問われてきた”と述べている[15]。

長澤が否定的な見解を持つ理由は何か。彼は八項目の“書誌学の研究範囲”を挙げている。その内の、“五、図書の収集、保存、分散等に関する事情、方法、歴史”や“六、文庫・図書館の類別、歴史”、“七、図書整理の原理、方法、歴史。イ 目録法　ロ 分類法”が、図書館学で扱うことである。そして、六については、“書誌学の一部であるべきもの”とし、七についても、“その理論に及び、広義の書誌

学に入れてよかろう”と付け加えているのである[16]。図書館学に隣接の書誌学の泰斗、長澤のこのような言辞は、知識階級や図書館界への影響が大きかったのであろう。

2. アメリカ図書館学への疑問

図書館学の成立可能性への疑問が表面化した出来事の一つに、第二次世界大戦後の連合国占領軍当局の図書館政策による、大学への‘Library School’の設置がある。アメリカ主導の占領軍の意図は、当然のことながら、アメリカ型の‘Library School’の移植である。これに対して、そこで学んだことのある図書館員から、例えば東京大学への設置への強い反対という形で、アメリカの図書館学への批判が出た。これについて根本彰は、“占領初期に”は“戦後の図書館政策に”関わった、同学附属図書館の司書官河合博が、アメリカの“戦前にライブライースクールに留学しアメリカ図書館学をよく知って”いて、そこの“教師”には“専門学者の持つ可き”“歴史的洞察及び理論的思索に欠けて居る者が”おり、“図書館学校”の教育内容は“一般に初歩的で”あって、“高等な学問の臭いはない”と思っていたこと、ダウンズの考える図書館学校の理念に失望したことなどを挙げている。そして、根本は、“帝大系アカデミズムの観点からすると、アメリカ流の図書館学がきわめて実学的であり、日本の大学の伝統に位置づけにくいものであったことが伺える”と、述べている[17]。

河合の指摘するアメリカ図書館学の哲学の欠如については、1953年から1985年の定年退官まで、東京大学の図書館学講座の専任であった故裏田武夫名誉教授も[18]、“最も不満に思うこと”であると述べ、その理由として、“哲学”には“学問の方法論自身を自己反省して、その方向を軌道修正していく”役割があることを挙げている[19]。日本の図書館界の多くの指導者たちと同様に、日本の図書館での実務経験とアメリカの大学の‘Library School’への留学経験があった裏田教授も[20]、やはり同じ様な感想を抱いたのである。

3. 理念不在と〈学〉の確立

現在の日本の図書館学の状況について、影浦峡は論考の文末の、“[お勧めの一冊]”の解題の中で、“「図書館学」内部で理念不在のままに技術的・微視的論考が増殖するなか、「図書館」の臨界条件とそこに読み込まれた理念を再考するために、図書館を比喩として語るこの2点は示唆に富む”と、ミシェル・フーコーの「幻想の図書館」とホルヘ・ルイス・ボルヘスの「バベルの図書館」を推奨している[21]。理念不在なことは、アメリカ図書館学の強い影響の現れであろうか。

何れにしても、研究者としてなすべきことは、武居権内がかつて述べたように、“図書館学”の成立に疑問を抱くことよりも、“如何にして学問的内容をもつべきかを思考”することである[22]。岩猿敏生も、同じ趣旨のシェラ（J. H. Shera）の文を引用した上で、“現実の図書館そのものをすぐに図書館の対象と考えるのではなく、図書館学とは何か、すなわち図書館学を構成するその内容は何かを問わなければならない”と付け加えている[23]。そのように創り上げられるものは、“他の学問領域で

まだ取り上げてられていない新しい領域”で、“一つの文化的価値を持った独自の学問領域”になる。それは“独創的な研究者”が“それぞれ独自の図書館学を構成するので”、その“名を冠して”例えば“シェラの図書館学”などと呼ぶと、岩猿は説明している[24]。そのような図書館学を目指す試みが多くなされることが、望まれるわけである。

Ⅲ. 概論書に見る〈学〉の体系と定義

〈図書館〉の〈学〉としての〈図書館学〉の目的は、言うまでもなく、「図書館」と呼ばれる〈もの〉の解明である。そのためには、〈図書館〉の定義域を明らかにし、その過程で解明する方法を紡ぎ出す必要がある。それを、自らの哲学に基づいて、図書館学の体系化を目指している以下の概論書の目次と、図書館の定義域の呈示、方法論などで見ていくことにする。

1. 椎名六郎『図書館学概論』(1960)

序文によると[25]、読者として想定しているのは図書館学の受講生と担当教員であり、執筆目的は図書館とは何か、どういう機能を持っているかについての“見解”を呈示することである。しかし、種々の制約でその“見解”を“深く徹して、意をつく”すことはできず、“簡約して明らかに”せざるを得なかったようである。本書が教科書と概論書の折衷的な著作であることは、その因果なのであろう。

椎名が本書で呈示している図書館学の体系は、どのようなものか。目次は次のようになっている。Ⅰ図書館学の概念、Ⅱ社会と情報の伝達、Ⅲ図書館の本質、Ⅳ図書館資料の生産と機械の発達抄史、Ⅴ図書館資料の類別とその性格、Ⅵ図書館の発生とその発達抄史、Ⅶ図書館行政、Ⅷ図書館の機能、Ⅸ図書館の組織、Ⅹ図書館のにない手、ⅩⅠ資料の処理、ⅩⅡ資料の蓄積、ⅩⅢ図書館奉仕の諸相、ⅩⅣレファレンス・ワーク、ⅩⅤ対外活動、ⅩⅥ図書館建築と設備、ⅩⅦドキュメンテーション。

この内容を、前半のⅠからⅢが図書館の社会的意味、ⅣとⅤが図書館資料の特質、ⅥからⅩは図書館の制度、ⅩⅠからⅩⅤは図書館管理・運営法、ⅩⅥ施設・設備、ⅩⅦ旧来と異なった図書館関連の新技術の意味、とに類別することができる。椎名は前半では、図書館の常識的な定義と図書館学の歴史を紹介しつつも、いつの時代にも人間生活に重要な存在である情報の伝達回路として、図書館を位置づけることによって、図書館の社会的基盤を確かなものにしようとしている。Ⅳ以下でも、情報伝達の観点からそれらを説明する姿勢は変わらない。

この背景には、国際的な経済競争の中で科学技術や経営関係の情報の重要性の増大と、それを提供する研究所や企業の管理部門の資料室が拡充され、日本でも国策として日本科学技術情報センターが1957年に設置されるなどの動きがあった。椎名が一章を設けているドキュメンテーション活動とその研究が関係者たちによって行われ、その成果は叢書や便覧としても結実して行く。それらは、図書そのものの提供ではなく、図書を含む様々なメディアに含まれる〈情報〉を提供する図書館である。まさにそれが時代の要請に応える図書館であった。

このように、社会的存在としての情報から、演繹的に図書館を解明しようとするためか、図書館の定義は、様々な定義の紹介に留まり[26]、そこから各章の主題が導き出されることはない。そして、図書館の理念を取り上げている“Ⅲ 図書館の本質”では、“情報伝達の回路”から説き起こし、その一つとして図書館を位置づけている[27]。それは、存在の基盤を確かにするために、情報をキーワードとして、社会における有用性を証明し主張する姿である。そこにはアメリカの図書館理論の影が垣間見られるのである。

2. 椎名六郎『新図書館学概論』(1973)

序文によると、書名の「新」は前著、『図書館学概論』の改訂のためとある[28]。章の記号はローマ数字からアラビア数字に変わり、節以下の区分は理工学書に多いピリオドで階層化の形式で行っている。ここには、旧来のいわゆる〈文系〉の図書館学とは違う、〈理系〉に近い新しいの図書館学という主張が、「新」が付けられた書名と共に、込められているかのようである。

章立ては、1. 社会と情報、2. 図書館の概念、3. 図書館の発生とその発展、4. 情報媒介体ならびに伝達手段の発展、5. 図書館学の発生とその発達、6. 図書館学の形成、7. 図書館の機能、8. 業務のシステム、9. 図書館行政、10. 資料論、11. 資料の組織、12. 情報サービス（レファレンス・ワーク）、13. 情報管理、14. 情報検索、となっている[29]。前著に比べると、情報を基軸として図書館学を組み替える方針がさらに徹底される。前著で第2章にあった“社会と情報”を冒頭に置いたのも、その現れである。しかし、それと関連の深い情報管理や情報検索を末尾の2章に置くなど、構成に疑問が残る部分もある。

本書でかなりの紙幅を費やしているのが、図書館学についての記述である。2.2で図書館学の意義を取り上げ、間に図書館史とメディアの発達（年表部分が殆どである）を主題とする二つの章を挟み、第5章で学説史を述べる。一方、図書館の定義の方法は前者と同様で、諸外国の「図書館」に対応する名辞とその定義を記述した後で、“私見としては「図書館は情報伝達の社会機関である。」と定義したい”と結論している[30]。この定義にも、前著と同じ、椎名の姿勢が見られる。それは、アメリカが先頭を行く近現代の図書館の定義であるために、それ以前の図書館の略史の記述との間に乖離を生む原因となっている。

3. 武田虎之助『図書館学概論』(1976)

武田は小学校高等科を卒業してから、各地の帝国大学の図書館を経て東京帝国大学付属図書館に勤務し、文部省（現文部科学省）の事務官として1950年の「図書館法」成立に関わり、後に東京学芸大学、東洋大学、鶴見大学の各教授を歴任している[31]。本書に序文を寄せた長澤は、武田を“館界の大御所的存在であったにもかかわらず、自分に学歴がないことをみずから口にし、そのくせ学歴のある館界人以上に欧米の原書を読み、欧米の館界の古今の事情に通じ、一方で館員の初歩的心得を指導”した点でも“館界にまれに見る偉大な人物であった”と高く評価している[32]。このような武田の構想

する図書館学は、どのようなものなのか。

本書は口述を元に元慶應義塾大学教授中村初雄ら（編者）がまとめたものであり[33]、著者は1974年に没している[34]。章立ては、“第1章 社会と図書館（序論）第2章 図書館の構成要素（基礎論）第3章 図書館の成立条件（思想論）第4章 図書館の奉仕（奉仕論）第5章 図書館の分類（分類論）第6章 図書館の目録（目録論）第7章 図書館構想（大学図書館論）付録”で、それぞれの標題に注記がついている[35]。中村によると、本書のための口述から文章化したのは第6章までであり、“第7章は、他の機会に”口述されたものを、“本書の未完成部分を補うために”、また、“付録”は武田が執筆したものの中から“本書の内容にふさわしいと思われるもの”を、編者がそれぞれ加えたという[36]。

武田の講義が受講者たちを心服させる内容であったことは、本書の成立事情と本文から知ることができる。そして、前節で触れたように、図書館学の成立可能性を否定していた長澤規矩也も[37]、内容を高く評価して、本書に序文を寄せているのである。しかし、長澤の寄せた序文を見ると、武田の素描する〈図書館学概論〉は、あくまでも〈通論〉であって〈概論〉でないというのが、長澤の評価であると言ってよい。それは、長澤がその中で、“晩年の講義を筆記されたものを一読して感じた”ことは、それが“微に入り細をうがって、通論の域から脱して”いる他の多くの“通論概説”とは違い、“現場経験を持たない学生に対する通論として最もふさわしい、特色ある内容であることを認め、公刊を要望した”と述べているからである[38]。

しかし、武田が〈概論〉を目指していたことは、第2章の「6 図書館の本質」の中で、“図書館を観念的、もしくは思想的にとらえて、確固とした理念をふまえた上でなぜ図書館が生まれ、なぜ今のような状態になってきたか、あるいは将来はかように変わらなければならないか”を“的確にとらえ”ることが、図書館の“運営”に必要であると主張していることにも示されている[39]。これは、まさしく〈図書館学概論〉の〈自序〉の一部にしてもよい内容である。

口述という制約のためか、上に垣間見られた構成の乱れは、〈図書館の定義〉の部分に見られる。議論の初めの方で行う考察の対象の明確化を、本書では第3章で取り上げているからである。それは、『図書館ハンドブック』（日本図書館協会）に収載されていることから、当時の図書館界の標準的な定義と言うことができる。なお、武田によると、その出版の際に“大事な点”、即ち“利用者の要求に応えて”が落ちてたので、それを補ったものが当時“一般に定着している”、武田の考える定義になるという。

それは、‘利用者の要求に応えて、記録された伝達材（知的文化財 - 原注）を収集、組織、保存して利用に供する社会機関である’になる[40]。しかし、第2章の中で考察の対象としようとする図書館に、この定義を当てはめると問題が生じる。この定義が適用されるのが主に近代図書館であるのに対して、第2章の図書館はそれ以外の社会のものも含まれるはずだからである。

しかし、全体を通じて言えることは、様々な図書館を抽象化した図書館の生理と論理が、簡潔な口調で語られていることである。それは、これが〈武田図書館学〉の素描であるためである。そして、

本書が後進への貴重な指針であることは間違いない。

4. 加藤一英『図書館学序説 - 学的体系づけへの探求 -』(1982)

著者の加藤一英は、序文の中で、本書執筆の目的を、“図書館職の専門性の確立”のために“図書館学の学的体系づけ”を行うためとしている[41]。内容は全3章から成り、“付説”として、「中井正一の哲学・美学思想と図書館思想」が収載されている。なお、“付説”と本論部分との関係については説明がなく、収載の積極的意味は不明である。

章立ては、第1章総説、第2章コミュニケーションと図書館、第3章図書館シンタックス論となっている。加藤は、第1章の冒頭で“図書館学は他の諸科学にくらべ、原理論的にも、また方法論的にも、さらには体系性といった点でも不十分であり、もろさや欠陥を含んでいる”と、〈学〉としての問題点を挙げる[42]。そして、彼はそれを克服しようとしたバトラーが、社会現象と考えた図書館を“社会的、心理的、歴史的に解明”した『図書館学序説』で[43]、〈図書館学〉を確立したことに学ぼうとする。

図書館学の確立を目指す加藤は、著名な学者たちの知見に基づいてその基盤を固めようとする。彼が引用する学者は、言語学者のソシュールやチョムスキー、メディア論のマクルーハン、コミュニケーション・モデルのシャノンとウィーバーなど、さらに広範である。とりわけ最も多く引用しているのは、社会学者たちのものであり、マックス・ウェバー、ジンメル、シェラ、マートンなど、著者の博識が披露される。その中でも目立つのは、『図書館社会学』の著者カールシュテットである。

同書は、加藤が河井弘志と共訳しており[44]、その序文でカールシュテットは、本国ドイツの専門誌では“あえて黙殺し”た著作を、“遠く離れた異国語に翻訳”する人が現れたことへの“驚”きを述べている[45]。この序文からも、加藤がカールシュテットの方法論に大きな影響を受けていることが伺える。

様々な学問、特に社会学の方法論によって、図書館現象を解明しようとする加藤の試みは、成功していると言って良い。それは、図書館管理法で扱われてきた図書館業務の基底にある論理を垣間見せてくれる。残念なのは、特に社会学にその方法論を依拠し過ぎているように見えることである。それは、その試みが成功しても、その理論体系は社会学の一領域ものになってしまい、独立した〈学〉としての〈図書館学〉にはならないからである。確かに、幼い段階にある学問は、他の学問の方法論から多くを借りざるを得ない。それ故に、残念なのである。前述のように、情報理論で図書館を解明することで生まれた〈図書館情報学〉が、〈図書館学〉ではなくて、〈情報学〉の一分野になっていることと、それは符合するのである。

なお、この後に続くべき筆者の〈図書館学〉の体系のための序章、〈図書館の概念〉の部分は、「はじめに」でも述べたように、残りの紙幅には入らないので、別の機会に譲ることにした。

注

(1) 「学校図書館の概念(その1)」(『図書館学会年報』、Vol.22, no.1, May, 1976)の「図書館の概念」の項目。

(2) 三田図書館・情報学会編『図書館・情報学研究入門』、勁草書房、2005、p.219.

(3) 同前、p.219.

(4) 根本彰は、"図書館情報学のほか、日本語では〈図書館・情報学〉,〈情報図書館学〉の用語が用いられている"と述べている(『図書館情報学ハンドブック』(第2版、丸善、1999, p.2. この部分は根本が執筆している。)。しかし、筆者の経験では、「情報図書館学」を目にすることは少ない。

(5) 津田良成編『図書館・情報学概論』(第2版)、勁草書房、1990. p.1.

(6) 『図書館情報学ハンドブック』(第2版) 前掲書、p.2.

(7) 同前、p.2.

(8) 同前、p.3.

(9) 同前、pp.2-3.

(10) 同前、p.3.

(11) 同前、p.3. ちなみに、その5つを英語の注記と番号をそのままに、紹介すると、次のようになる。"①図書館学が対象を情報一般へと拡張した領域 (library science expanded for information), ②図書館と情報を対象とした学 (science of libraries and information), ③図書館学と情報学の融合した領域 (fusion of library science and information science), ④図書館を対象とした情報学 (information science for libraries), ⑤図書館が扱う情報の学 (science of library information)"。

(12) 注7を参照。

(13) 大佐三四五『図書館学の展開』、丸善、1954. p.1.

(14) 椎名六郎、岩猿敏生『図書館概論』(日本図書館学講座1)、雄山閣、1977. p.248.

(15) 岩猿敏生「図書館学とは何か」『新図書館ハンドブック』、雄山閣、1984. p.1.

(16) 長澤規矩也『書誌学概論』(修訂版)、吉川弘文館、1965. pp.2-3. なお、引用の漢字は新字体に直してある。

(17) 根本彰「戦後図書館学論:「学」と「現場」が分離した頃」『図書館情報学のアイディンティティ』(論集・図書館情報学研究の歩み 第18集)、日外アソシエーツ、1998、p.125. なお、根本が引用した文中の「歴史的洞察」と「理論的思索」には、それぞれに「ヒストリー」、「フィロソフィー」とルビがふってある。

(18) 「裏田武夫先生略年譜」裏田武夫『図書館学の創造』、日本図書館協会、1987. pp.334-339.

(19) 「今後の図書館学研究の方向 - 三つの領域をめぐって -」、同前、p.40.

(20) 「裏田武夫先生略年譜」、同前、p.334.

(21) 影浦峡「図書館」三浦逸雄監修、根本彰編『図書館情報学の地平50のキーワード』、日本図書館協会、2005. p.194.

(22) 武居権内『日本図書館学史序説』、早川図書、1960. p.8.

(23) 岩猿敏生、前掲、p.1.

(24) 同前、p.2.

(25) 椎名六郎『図書館学概論』、学芸図書、1960. 前付 p.1.

(26) 同前、pp.22-25.

(27) 同前、p.47 以下。

(28) 椎名六郎『新図書館学概論』、学芸図書、1973. p.1.

(29) 同前、pp.3-8.

(30) 同前、p.24.

(31) 武田虎之助『図書館学概論』(現代図書館学叢書 1)、理想社、1976. 奥付。

(32) 同前、p.3.

(33) 同前、pp.145-149.

(34) 同前、奥付の“著者紹介”。

(35) 同前、pp.5-8.

(36) 同前、p.149.

(37) 注 13) 参照。

(38) 武田虎之助、前掲書、p.3.

(39) 同前、pp.24-25.

(40) 同前、pp.26-27.

(41) 加藤一英『図書館学序説 - 学的体系づけへの探求 -』、学芸図書、1982. pp.1-2.

(42) 同前、p.9.

(43) Butler, Pierce, *An Introduction to Library Science*, 1933. 藤野幸雄訳『図書館学序説』、日本図書館協会、1978. p.25.

(44) Karsted, Peter, *Studien zur Soziologie der Bibliothek*, 2.Aufl. 1965, 加藤一英、河井弘志訳『図書館社会学』、日本図書館協会、1980.

(45) 加藤一英、河井弘志訳、同前、p. iii.

(2006 年 9 月 19 日受理)